

政党超えたカリスマ 亀次郎の生きざま演じる

「差別」をテーマにした作品をここ数年、追いつけて来た。同時に戦争、平和をテーマにした作品も追って来た。沖縄出身の俳優として。いつのころからか、そうなってしまう。

そして去年、沖縄タイムス創刊70周年の節目に何か作品の上演を、と依頼され、「人類館」という作品を選んだ。沖縄の作家への追悼という意味もあった。幸い好評の内に閉幕し、続けて来年も何か...という話になり、恐る恐る「亀次郎」という作品を提案した。

沖縄が生んだ政治家である。しかし、その時点ではまだ作品はなかった。20年近く前に映画

津嘉山正種

「瀬長亀次郎物語」公演に寄せて

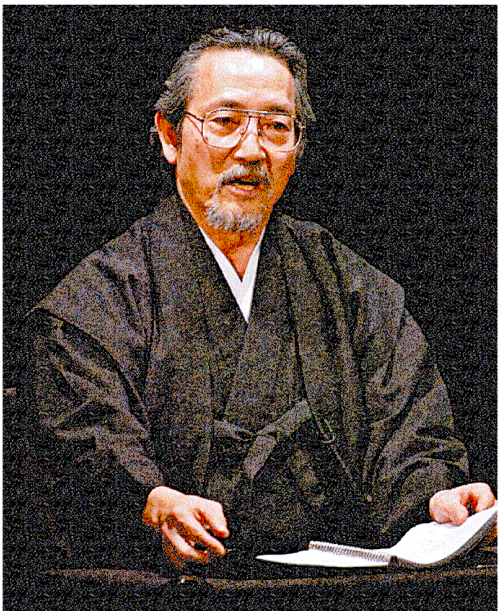
で「亀次郎」を演じた事があった。その時からいつかは、この政治家の話を舞台で、と思っはいた。だが、いざ「亀次郎」の舞台化を進め始めてみると思っていた何倍も試行錯誤する事になる。

良く知られている人物だけに、そして「亀さん」「亀次郎さん」果ては「亀次郎！」と親しみを込めて呼ばれた人物。皆に愛されてはいるが、政治的に人民党の人物という事で、沖縄ではこじ開けてはいけない、何か、タブーのようなものを抱えている人物のようでもあった。しかし「オール沖縄」という尺度で考えると、確かに支持政党を超えて存在した、カリスマ的な要素を持った政治家であった。

私は今、その「オール沖縄」という立ち位置で亀次郎にスポットを当ててみようと思っている。そして、その思いを支える大きなヒントは、亀次郎が口癖のように口にした「むしるぬ綾の如く歩かんと、ならんどう」である。母親がいつも口にした言葉のようだが、その言葉を「正義と道理」と解した亀次郎は生

涯、その言葉通りの道を行くのだと言えるのではないだろうか。

苦渋と悲惨な歴史の中で、常に生きるための選択を迫られた沖縄民衆の姿、善と悪、不運と幸運、希望と絶望、ありとあらゆる事を体験、体現した亀次郎像を、何とか浮かび上がらせる事ができればと考えています。
(1面参照)



「ひとりの語り『瀬長亀次郎物語』公演に挑む津嘉山正種氏